

平成 26 年度（第 16 期）事業計画

I. 調査研究

A. 黒潮流域における生物相調査（生物多様性、自然史に関する総合的な情報の収集・整理）

黒潮生態系に関する多面的、網羅的な情報（生物相、生態系の多様性、種多様性、遺伝的多様性に関する情報、自然史情報）を広く収集することで、地域生態系の構造や機能、特性などの理解と長期的な環境変動の把握を行う。また、得られた情報を国内外の調査研究の用に広く供することで、海洋生物研究の発展や海域保全活動の推進に寄与する。

1) 四国沿岸域における海産無脊椎動物相の把握、および地域生態系、生物多様性に関する情報の収集と整理

○四国沿岸の海産無脊椎動物相調査（生物多様性調査・一般標本の収集）

黒潮生物研究所のプロジェクト調査として平成 13 年度から四国沿岸の浅海域における海産無脊椎動物相調査を継続して実施し、地域生態系に関する広範な情報（分布や生息環境、生態に関する情報、生態写真、標本写真等の写真資料など）の収集と一般標本の収集を進めている。平成 26 年度は全域的な調査を継続するとともに、対象範囲を絞り込んだ集中的な潜水採集調査を実施する。愛媛県愛南町西海海域、高知県宿毛市沖の島海域、高知県土佐清水市竜串海域などを候補地とし、このうち 1 地点で 3～6 日間程度の採集調査を実施する（一部請負調査等と合わせて実施を検討）。なお、この集中調査については必要に応じて外部研究者や作業補助員として一般ダイバーなどの参加も募ることとし、マスコミ等を通じた調査結果の公表（情報発信）を積極的に行う。なお、平成 25 年度に高知大学の協力を受けて、DNA 抽出のための設備（遺伝子解析室）の整備が進んだので、平成 26 年度から生物相調査に合わせて遺伝子情報（DNA サンプル）の収集を進める。

○四国沿岸およびその周辺海域の造礁サンゴ相の把握および造礁サンゴ群集の分布と攪乱、変遷に関する研究

四国沿岸域において生態系の基礎としての役割を担う造礁サンゴ群集の動態を把握するための基礎調査を研究所開所当初から継続して実施している研究。四国西南海域を中心に潜水採集調査等を実施し、造礁サンゴ相を明らかにするとともに、スポットチェック法およびその他の調査手法を用いた現地調査により、広域的な造礁サンゴ類の分布状況と攪乱状況の把握、またサンゴ群集の変遷などを記録している。平成 26 年度も継続して調査を実施し、全域的な情報の収集を進める。なお、本調査は東海大学との共同研究、当該海域で行われるモニタリング事業（モニタリングサイト 100 事業ほか）、保全対策事業（水産多面的機能発揮対策事業ほか）などとの連携により行う。

○四国西南海域の棘皮動物相調査

過去にまとまった情報が得られていない四国沿岸域の棘皮動物相を明らかにするため、平成 23 年度より継続して実施している調査。四国西南海域を中心に潜水採集調査、漁具を用いた採集調査、宝石珊瑚漁や底引き網漁等の混獲物調査を行い、潮間帯から水深 150m までの浅海域について棘皮動物の分布に関する情報、種多様性情報、標本の収集・整理を行っている。平成 26 年度は採集調査を継続し、標本収集を引き続き行うとともに、これまでに得られた情報を取りまとめ、標本に基づいた採集記録、網羅的なリストを作成し、報告を行う。ウミシダ類については形態的特徴、生態的な情報を生態写真とともにまとめたフィールドガイドを作成する予定（Kuroshio Biosphere に掲載予定）。なお、本調査は国立科学博物館藤田研究室、和歌山県立自然博物館、神奈川大学理学部金沢研究室などの外部研究機関等の協力を受けて進める。

○四国沿岸の海産等脚類相に関する研究

これまで十分な知見が蓄積されていなかった四国沿岸の海産等脚類相を明らかにする目的で、日本における等脚類研究の第一人者である布村昇氏を招聘し、共同研究として平成 23 年度より継続して調査を実施している。平成 25 年度までに愛媛県、高知県の採集調査が終了し、主に海岸域についての分布情報と普通種の標本群が得られた。平成 26 年度は高知県西南地域の浅海域（主に潮間帯）の海産等脚類相に関する報文のとりまとめを行い、当財団の紀要に掲載する予定（平成 27 年 4 月発行予定の Kuroshio Biosphere）。

○四国西南地域における潮間帯生物相の把握

平成 24 年度より四国西南海域の潮間帯生物相（主に大型の底生無脊椎動物相）の把握を目的として、高知県土佐清水市から愛媛県愛南町にかけての岩礁性潮間帯、砂浜、干潟域において採集調査を実施している。平成 26 年度は一部請負業務（水産多面的機能発揮対策事業）として高知県宿毛市宿毛湾、土佐清水市竜串湾などで重点的に調査を進め、網羅的な出現種リストを作成する予定。また、市民参加型の生物調査の実施も合わせて検討する。

○造礁サンゴ類の分布北限域におけるイシサンゴ類、ソフトコーラル類、海藻類の分布構造の変遷に関する研究

平成 20 年度から継続。南日本の太平洋岸を中心に、海水温の上昇に起因すると考えられる底生生物群集の分布構造の変化が各地で報告されている。造礁サンゴ類（イシサンゴ類）の分布北限域であると同時に豊かなソフトコーラル相や多様な藻場が見られる四国沿岸（特に愛媛県宇和海海域および徳島県阿南海域など）において、イシサンゴ類、ソフトコーラル、海藻類などの固着性の底生生物の分布状況を記録し、過去と比較することで、その種構成や分布構造の変化から、相互関係の解明と長期的な環境変動の影響の把握を行う。高知大学黒潮圏総合科学研究科、竹ヶ島海中公園自然再生協議会、その他各地の海域環境保全団体等との協力関係のもとで実施する。

○四国沿岸域におけるオニヒトデの分布状況の変遷および動態に関する研究

四国太平洋沿岸では近年、サンゴを食害する大型のヒトデ、オニヒトデが大発生しており、各地のサンゴ群集に大きな被害が発生している。これを受けて効果的な対策の実施と影響評価に必要な基礎資料を収集し、高緯度域におけるオニヒトデの動態を明らかにするために、平成 15 年度から継続して調査を実施している。自主調査、または請負業務として主に四国西南海域での現地調査を行うとともに、聞き取り調査や既存資料調査により、四国太平洋岸における全体的なオニヒトデの分布状況、サンゴ群集の攪乱状況の把握を行っている。平成 26 年度は請負業務として足摺海域（高知県土佐清水市足摺半島から高知県宿毛湾海域まで海域）について、全域的な調査を実施する予定であり、この結果を踏まえて四国太平洋岸における現在の現状をまとめる。

2) 四国西南地域の沿岸域における生物資源の利用とその変遷に関する研究

足摺宇和海国立公園海域における自然資源、生物資源の利用とその変遷に関する情報を収集・整理する。平成 26 年度は聞き取り調査、既存資料調査等を行い、高知県の宿毛湾とその周辺の地域についての情報を重点的に集める（一部、宿毛湾環境保全連絡協議会の水産多面的機能発揮対策事業の中で実施を予定）。

3) 黒潮流域における八放サンゴ亜綱ヤギ類の分類学的・生物地理学的研究

九州南部産（宮崎県南部および鹿児島県本土海域から得られたヤギ類標本：東京大学所蔵）および紀伊半島産（黒潮生物研究所収蔵）のヤギ類標本を精査し、各海域におけるヤギ類相に関する報告をまとめ、分類学的、生物地理学的考察を行う。

4) 美ら海水族館周辺八放サンゴ類相調査

平成 23 年度から継続している海洋博覧会記念公園管理財団との共同調査（請負業務）。美ら海水族館周辺の八放サンゴ相を明らかにすると共に、その成果を展示や図録の刊行等を通して普及するための基礎資料の作成を目的とする。平成 26 年度は調査の最終年度となり、とりまとめを行う。

5) 八放サンゴ類の同定（和歌山研究室で実施）

国内外の研究機関等から依頼された八放サンゴ類（ウミトサカ類）標本の同定作業を行う。平成 26 年度はタイのチュラーロンコーン大学（A-Core 参加大学）、大洗水族館、淡島マリナパーク、男鹿水族館、下関水族館、国立科学博物館などから依頼を受けた標本の同定を行う。

6) 他の研究機関が行う生物多様性調査等への参加

他の研究機関により国内外で行われる生物調査等に参加する。平成 26 年度は大阪湾海岸生物研究会の定点調査・合宿調査、国立科学博物館小笠原調査、東京大学大気海洋研究所の東南アジア教育研究拠点形成事業におけるタイでの調査（10 日前後）に参加する予定（すべて和歌山研究室 今原研究員が参加）。

7) 黒潮生態系に関する生物多様性情報、自然史資料等のライブラリ化の検討

これまでの財団の調査研究活動で蓄積されてきた黒潮生態系等に関する生物多様性情報、自然史情報を広く一般に供するため、標本、写真資料（生態写真、景観写真）、映像資料等のライブラリ化を進める。

B. 海産無脊椎動物の分類学的研究

1) 造礁サンゴ類（イシサンゴ類）、八放サンゴ類

○形態および生態情報に基づく造礁サンゴ類の分類学的検討

国内外の研究者と連携し、黒潮生物研究所の調査・研究活動で得られた生態的・形態学的情報（四国の造礁サンゴの産卵生態に関する知見や交配実験結果、骨格や組織の微細構造などの情報）と、他の研究機関等が持つ分布情報や遺伝子情報などを総合的に検討し、造礁サンゴ類の分類について再検討を行っている。平成 26 年度はこれまでの取り組みを継続して進めるとともに、高知大学とのプロジェクト研究として、形態学的分類指標（骨格形態）と生態的情報、遺伝子情報を合わせた分類指標の探索を行う。また、平成 20 年度から始まった「日本造礁サンゴ分類研究会」における取り組みに継続して参加する。

○愛媛県宇和島産・オーストラリア産ヒュサンゴの遺伝パターン解析

世界で一属一種とされているヒュサンゴについて愛媛県宇和島湾産と南半球産のサンプルについて遺伝パターン解析を行い、得られた結果に基づいて分類学的検討を行う。

○相模湾産八放サンゴ類未記載種の記載（和歌山研究室で実施）

平成 25 年度にまとめられた相模湾産八放サンゴ類で「未記載種」として掲載した標本を新種登録するための論文のとりまとめを行う。

2) 棘皮動物

棘皮動物相調査等で得られた情報・標本を基に棘皮動物に関する分類学的研究を行う。平成 26 年度は以下のテーマが取り込まれる予定。

○高知県大月町柏島から得られたウミシダの未記載属についての記載

○土佐清水市沖および宿毛市沖の島海域で得られたケムシヒトデ科 *Chaetasteridae* 未記載種の検討

また、ホウキボシ科の系統関係の再検討（国立科学博物館藤田研究室）、浅海性樹手目ナマコの分類学的研究（和歌山県立自然博物館 山名氏）、日本産ウニ類の系統分類学的研究（神奈川大学理学部金沢研究室）などに協力する。

3) その他の生物

○高知県大月町西泊海域で観察されたスギノハウミウシ類の未記載種の分類学的検討

客員研究員の中野が平成 25 年度より行っている研究。平成 26 年度も採集調査を予定。得られた標本に基づいて分類学的検討を行い、種を記載する。

C. 海産無脊椎動物の生態研究（生息環境、繁殖生態、生活史、食性、種間関係など）

1) 造礁サンゴ類の繁殖生態・生活史に関する研究

○高緯度域におけるイシサンゴ類の産卵パターンの把握

平成 14 年度より継続して実施。造礁サンゴ類の産卵期である初夏から夏にかけての時期に、夜間及び早朝等に潜水調査を行い、造礁サンゴ類の生活史を知る上で最も基礎的な情報のひとつである産卵に関する情報を収集している。調査地は、高知県大月町西泊の研究所地先ほか、同町柏島地先、土佐清水市竜串湾地先などである。これまでに 51 種の造礁サンゴ類の産卵等を確認しており、多くの種の産卵様式や産卵パターン、雌雄性について新たな知見が得られている。平成 26 年度もこれまでと同様な調査を継続し、得られた配偶子を利用した共同研究等を進める。

○野外における幼サンゴの動態に関する研究

台湾の中央研究院との共同研究として平成 24 年度より継続。研究所地先海域に設定した永久方形区について、引き続き、幼サンゴの動態を記録することにより、野外における幼サンゴの生残、成長に対する制限要因を検討する。

2) 棘皮動物の繁殖生態・生活史に関する研究

○高知県大月町におけるダキクモヒトデ（クモヒトデ目）の繁殖周期と生活史、およびペア形成機構に関する研究

富永英之氏との共同研究。高知県大月町古満目地先で標本採集を行い、ダキクモヒトデのペア形成機構、繁殖周期などを明らかにする。平成 25 年度は 6 月と 8 月の産卵期と 3 月下旬にサンプリングを行い、ペア形成の状況の観察、生殖腺の組織学的観察を行った。平成 26 年度についても継続してサンプリングを行うほか、サンプルの処理を進める。

○ニッポンウミシダ（ウミシダ目）の産卵期と制限要因の解明に向けた研究

平成 26 年度からの新規研究。神奈川県三浦半島（三浦）、静岡県伊豆（下田）、高知県土佐清水市竜串湾などで調査を行い、ニッポンウミシダの産卵期を調べ、各地の個体群の産卵期を比較することにより、その制限要因となる環境条件を明らかにする（外部研究機関との共同研究）。

D. 保全手法に関する研究

1) 造礁サンゴ類の種苗生産技術、移植技術の開発に向けた研究

平成 10 年度より継続にしている研究。平成 26 年度は引き続き、有性生殖を用いた種苗生産を行うとともに、得られた種苗を安定的な生産を目指す。なお、本研究は、徳島県海陽町で実施されている竹ヶ島海中公園自然再生事業、宿毛湾環境保全連絡協議会の保全対策事業等との連携により実施する予定。

2) カイメン類の飼育技術の確立に向けた研究

平成 24 年度より継続している須磨水族館との共同研究。研究所地先で採集したカイメン類を用いて、飼育下におけるカイメン類の生育観察、飼料の検討などを行っている。

平成 26 年度も採集と須磨水族館での飼育実験を継続して行う予定。

3) 貝殻増殖礁のサンゴ類の着生基盤としての有効性の検証

平成 15, 16 年度に JF 全漁連が愛媛県宇和島市戸島地先に沈設した貝殻増殖礁（海洋建設株式会社が開発）への造礁サンゴ類の着生状況、生育状況を平成 24 年より年 2 回程度の現地調査によりモニタリングしている。平成 26 年度も同様の調査を海洋建設株式会社と共同で実施し、貝殻増殖礁のサンゴ類着生基盤としての有効性の検証を進める予定。

E. その他研究

1) 造礁サンゴ類の染色体観察手法の開発および染色体の研究

高知大学との共同研究として造礁サンゴ類の染色体観察手法の開発および染色体研究を継続して行う。これまでの研究により初期の胚を用いることで造礁サンゴ類の染色体を詳細に観察することに世界で初めて成功した。しかし、一般に造礁サンゴの胚の入手は困難で、試料が得られる時期や機会が限られるため、胚以外を用いて染色体を観察する手法の開発に向けた実験を進めている。平成 25 年度に予備実験を終え、平成 26 年度は水槽飼育群体、野外の天然群体からのサンプル採取の手法を検討する。また、新たな手法により、造礁サンゴ類の染色体に関する情報を更に広く収集する。

2) アカサンゴ *Corallium japonicum* の遺伝的多様性の検討

平成 26 年度からの新規研究として宮崎大学、美ら海水族館との共同で足摺海域産、宿毛湾海域産、および沖縄産のアカサンゴを用いて、遺伝的多様性に関する検討を行う予定。

3) 棘皮動物由来の新規カロテノイド化合物の検索に関する研究

近畿大学農学部環境管理学科環境化学研究室（坂上 吉一教授）との共同研究として、海洋無脊椎動物の生理活性物質に関する研究を行っている。平成 25 年度は研究所地先に産する 13 種の浅海性クモヒトデを用いて、新規カロテノイド化合物の検索を行った。平成 26 年度も引き続き、棘皮動物の新規カロテノイド検索を行う予定。

2. 研究支援（研究助成ほか）

1) 外部研究者等への研究支援（情報・標本の提供、調査コーディネート、施設利用）

生物採取や野外調査で四国を訪れる研究者等に対する情報や標本の提供、サンプリング調査等のコーディネートを引き続き行う。また、調査・研究、研修・実習、講義・会合等の目的とした黒潮生物研究所施設の利用者の受け入れを行う。なお、研究所施設の利用に際しては「研究所利用規則」に従い、利用願いの申請が必要。

2) 一般市民への調査研究支援（技術指導、発表の場の提供）

市民が主体になって行う調査研究活動に対する専門的なアドバイス、技術指導を行

い、また機関紙等での発表の場の提供などを行う。

3) 研究助成事業（若手研究者の育成）

十分な研究資金を持たない学生や市井の研究者の研究に対して助成を行うことにより、次世代の研究者、地域と密着した研究者の育成を図ることを目的として、研究助成を行う。平成 26 年度助成については 20 万円 3 件を予定している。詳細は以下。

○応募資格：卒業研究を行う大学生、大学院生、その他の研究者

○助成内容：研究費の補助

○助成規模：1 件あたり 20 万円以内／3 件程度

○応募要領：在學生は指導教官の推薦状必要。一般は他薦の推薦書必要

○選考方法：理事／評議員が選考委員となり、点数制で順位を決め専務理事が決定

○助成研究成果の公表：財団所定の様式により、研究の概要について報告書を提出。

報告書はホームページ等で公表。一部、財団機関紙等で研究成果を発表する。

○募集期間：平成 25 年の 3 月から 4 月

○助成者決定時期：4 月下旬

○助成期間：1～3 年間（平成 26 年 5 月から）

3. 学会開催事業

1) 日本サンゴ礁学会の第 17 回大会（高知大会）の開催（平成 26 年 11 月 27 日（木）～12 月 1 日（月））

日本サンゴ礁学会は、サンゴやサンゴ礁生態系に関わる研究や活動を行う大学や研究機関の研究者、民間企業、団体、官庁、NGO、ダイバーなど、異分野の人々が参加する学会である。平成 26 年度に行われる日本サンゴ礁学会第 17 回大会を公益財団法人黒潮生物研究所・高知大学の共催（大会実行委員長：目崎拓真）により高知市で開催する。本学会の四国地域での開催は初めてとなり、250 名前後の参加を見込んでいる。なお、学会発表・シンポジウムは高知市内で行うが、エクスカージョンを研究所およびその周辺で実施する予定。

II. 自然環境保全

調査研究活動で得られた知見や情報を社会に還元し、専門知識や技術を自然環境の保全に向けた取り組みに活用するため、保全に資する事業、活動、施策に参加、協力し、あるいは取り組みの実施や支援を行う。

1. 環境保全、生物多様性保全等を目的とした事業・施策への参加・協力、支援および関連調査の受託

・モニタリングサイト 1000 事業における担当調査の実施

新・生物多様性国家戦略の策定を受けて平成 15 年度から環境省自然環境局生物多様性センターが行っている「モニタリングサイト 1000（重要生態系監視地域モ

ニタリング推進事業)」の四国西南部沿岸海域におけるモニタリング調査を研究所が担当している。平成 26 年度についても担当海域での継続調査（請負業務）を実施し、また、委員としての関連する会議等に参加する。

- ・宿毛湾環境保全連絡協議会の水産多面的機能発揮対策事業への参加と協力

関係漁協や海域利用者、地域活動団体等で構成される「宿毛湾環境保全連絡協議会」は平成 21 年度より宿毛湾沿岸地域の環境及び生態系保全、沿岸域の多面的機能の向上に向けた取り組みを継続して行っている。研究所は、請負業務として事業の全体計画の企画・立案、モニタリング調査の実施と事業効果の評価、保全活動に関する技術協力、進行管理を行っており、平成 26 年度も引き続き取り組みに参加する。平成 25 年度から取り組みの範囲が大幅に広がり、流域の保全、海域資源（藻場・サンゴ群集・干潟等）の再生・保全のほか、環境教育の推進、漁村の文化継承なども活動項目に加わっており、当該地域における総合的な取り組みとして重要性が高まっている。

- ・竜串自然再生プロジェクトへの参加

高知県土佐清水市竜串湾で行われているサンゴ群集をはじめとした豊かな生態系の維持回復、地域の自然資源の持続的な利用を目指す取り組みに参加する。研究所は協議会設立以前の平成 13 年度から取り組みに参加しており、平成 26 年度についてもこれまでと同様に海域モニタリング調査（請負業務ほか）を継続して実施するとともに、技術支援委員会や協議会、幹事会へ参加する予定。また、本プロジェクトに関連して地元 NPO と研究所が主催するモニタリング活動（竜串リーフチェック）を実施・協力するほか、近隣の小学校における環境学習プログラムの提案や実施、地域活動への参加や協力を引き続き行う。

- ・竹ヶ島海中公園自然再生協議会の取り組みへの参加

徳島県海陽町竹ヶ島海中公園地区の自然再生を目的とした事業に平成 17 年度から継続して参加している。平成 26 年度はこれまでと同様に協議会への参加、専門委員等の技術支援、モニタリング調査の実施（請負業務ほか）を予定している。また、関連して地域の NPO が主催するモニタリング活動（竹ヶ島リーフチェック：BSAC JAPAN 主催）に参加する。

- ・すくも湾藻場育成協議会の活動への参加

すくも湾藻場育成協議会は平成 23 年度に漁業協同組合、企業、NPO、大学、公共機関などが参加する協議会を立ち上げ、藻場再生に取り組んでいる（すくも湾漁業協同組合が予算化）。研究所はこの協議会に参加し、モニタリング調査、技術指導を担当している。平成 26 年度も同様な協力を行う予定。

- ・宿毛湾沿岸域総合管理研究会への参加

新海洋基本計画（平成 25 年 4 月閣議決定）を受けて日本でも「沿岸域総合管理」の取り組みが行われるようになった。高知県宿毛湾はこの取り組みの新規モデルサイトとして平成 24 年に選定されており、沿岸域総合管理に向けた活動方針を検討する

ための「宿毛湾沿岸域総合管理研究会」が立ち上げられた。研究所はこの研究会にメンバーとして参加しており、会議への出席、当該地域の沿岸生態系に関する情報の提供、研究所への視察の受け入れ、国際会議への参加（PNLG Forum 2013：東アジアの沿岸域総合管理に関するワークショップ）などを行っている。平成 26 年度についても引き続きこの取り組みに参加する。

・ 四国地域における生物多様性保全の取り組みへの参加

関係行政が行う生物多様性関連施策、国際自然保護連合日本委員会（IUCN-J）、日本自然保護協会（NACS-J）、国連生物多様性の 10 年日本委員会（UNDB-J）などの環境 NGO 等の活動との連携を図り、四国地域の生物多様性保全に向けた取り組みを進める。平成 26 年度は引き続き、四国生物多様性ネットワークへ参加し、徳島県で開催される四国生物多様性会議に参加する。また、平成 25 年度に高知県が策定した生物多様性こうち戦略の実現に向けて、施策に協力する。キックオフ・フォーラム（6 月上中旬）、ワークショップ（年 10 回程度）などへの参加を予定。

2. 海域保全活動団体等への活動支援

四国沿岸海域においてサンゴ群集の保全等の海域の保全活動を行っている民間団体に対して活動計画の立案に向けた情報提供、技術的な指導、その他の活動支援を行い、当該海域における自然環境保全活動の円滑化、活性化に寄与する。平成 26 年度は以下にあげた活動団体に対する活動支援を予定している。

- ・ 沖の島海洋レジャー事業組合、宿毛湾潜水研究会、JUDF 四国（高知県宿毛市沖の島海域におけるサンゴ保全活動）
- ・ NPO 竜串観光振興会（土佐清水市竜串湾周辺地域における流域、サンゴ群集、藻場等の保全活動、環境教育活動）
- ・ 愛南サンゴを守る会への活動支援（愛媛県南宇和郡愛南町西海海域におけるサンゴ保全活動、西海リーフチェック）
- ・ 足摺宇和海国立公園大月地区パークボランティアの会（足摺宇和海国立公園海域における海域保全活動、自然解説活動）
- ・ 土佐清水市観光ボランティア（土佐清水市足摺地区および竜串地区における自然解説活動）

3. 生物多様性保全、沿岸域における環境保全活動のネットワーク構築に向けた取り組み

地域における保全活動、環境活動の情報共有、ネットワーク構築を図るため以下の連絡会を運営、開催する

・ 足摺宇和海保全連絡協議会の運営および開催

平成 20 年 6 月に設立した足摺宇和海保全連絡協議会（会長：中地シュウ）の運営を共同で事務局を担当している環境省土佐清水自然保護官事務所とともに行う。平成 26 年度はメーリングリストを利用し会員相互の情報の共有を引き続き図るほか、会員の活動に必要な教育・啓蒙、会員の活動に必要な相互扶助の機会をつくることで

活動の活性化を図る。

・第4回海の守り人交流会の運営および開催

当財団の主催事業として四国地域で環境活動等を行っている個人や団体の交流会として「四国海の守り人交流会」を年1回開催する。平成26年度は例年通り高知県高知市において12～1月頃に開催を予定。基調講演と参加者による活動報告、全体討論等により、相互の交流を深めて四国地域における環境活動の現状や課題について考える機会とする。

Ⅲ. 普及啓発

調査研究活動で得られた科学的知見や自然史情報を活用した普及啓発活動に取り組む。この活動を通じて、研究成果のアウトリーチを行うとともに、黒潮生態系に関する知識を広め、科学教育・海洋教育の場としての地域の海辺の利用促進、科学的対話の機会創出、地域における生物多様性保全、自然環境保全に関する意識の高揚を図り、地域における自然教育、海洋教育、科学教育等の教育ネットワークの構築を進める。

1. 黒潮生物研究所所内における公開展示

黒潮生物研究所の1階の廊下を常設展示場として整備し、ポスターやパネル、写真、標本などの展示を行っている。平成26年度は展示内容の見直し、充実化を図る。

2. サマースクール、サイエンスキャンプ等の開催

黒潮生物研究所の開所以来、当財団では主催事業として、幡多・南予地方の小学生を対象とした2泊3日のサマースクールを夏休み期間中に1回開催している。このサマースクールは地域にすむ子供たちが地域の自然や生き物に親しむ機会をつくり、地域の自然に対する興味と関心を育て、自然とのよりよいつきあい方について考えてもらうことを目的としており、平成26年度についても例年通り実施する予定（募集人数40名程度）。また、上記以外に地域内外の中学生以上を対象とし、「海辺の生き物や環境に触れることを通じて、科学的なものの見方や考え方を学ぶ」ことを目的とした少人数のサイエンスキャンプの企画・実施を検討する。

3. 地域イベント等における生物多様性に関するブース展示

地域で行われる野外イベントにおけるブース展示、企画展等を通じて、地域の自然や生物多様性に関する知識を広める。イベントにおけるブース展示については、年3回程度（竜串奇岩フェスティバル：高知県土佐清水市、土佐清水市産業祭：高知県土佐清水市、エコラボ文化祭：高知県高知市など）予定しており、他団体と協力して、海中景観や自然景観の写真、生態写真、生物多様性に関するポスター展示、実物標本の展示、自然・生き物に関する体験コーナーの出展などを行う。

4. 海洋生物や沿岸の環境に関する科学的対話機会の創出

研究所、または他団体の主催事業等として地域で行われる海域モニタリング調査、保全活動、自然観察会等の開催に合わせて、地域の自然環境、生物多様性等に関する講演

等を行い、研究者と市民との科学的対話の機会をつくる。平成 26 年度は以下のような講演等の実施を企画・検討する予定。

- ・地域で行われているリーフチェック調査（土佐清水市竜串、愛媛県愛南町西海など）に合わせた勉強会・研修会
- ・地域活動団体によるサンゴ保全活動等に合わせた勉強会・研修会
- ・四国西南地域で行うサンゴの産卵観察会・勉強会（研究所主催）
- ・研究所を利用する外部研究者を講師とした講演会、セミナーの開催
- ・都市部での地域の自然に関する講演会、写真展等の開催

5. 海辺の環境教育・社会教育の推進

海辺を使った教育プログラムの提案・企画および開催や学校教育、社会教育の場への講師の派遣、自然の教材化に向けた取り組み、環境教育、自然教育のネットワーク構築に向けた取り組みを行い、地域における海辺の環境教育、社会教育の推進を図る。

1) 自然教育、科学教育プログラムの企画・開催および講師派遣

学校教育や社会教育の場で行われる環境教育、自然教育、科学教育プログラムの企画・提案を行い、関連する依頼に応じて講師を派遣する。平成 26 年度については以下のような機会が予定されている。

- ・地域の学校で行われる自然学習、環境学習等への講師派遣（年 8 回程度）

土佐清水市立三崎小学校総合学習（講師派遣 1～2 回）、愛南町立内海中学校海学習（講師派遣 3 回）、大月町立大月小学校地域学習（講師派遣 2 回）、高知県立四万十高等学校自然環境コース授業（講師派遣 1 回程度）

- ・海辺の指導者育成、人材育成プログラムの企画運営および支援（年 4 回程度）

土佐清水市教育研究会理科部会、大月小学校校内研修会、足摺宇和海国立公園大月地区パークボランティア研修会（一部請負業務）、土佐清水市観光ボランティア研修会

- ・社会人向け、大学生生物系サークル向け研修会の企画・開催および開催支援（年 2 回程度）

愛媛大学スキューバダイビング部、東京海洋大学水産生物研究会、東京大学海洋調査探検部、大月町役場青年部などの宿泊研修会の受け入れを検討中。

2) 地域の自然の教材化に向けた取り組み

市民団体、学校、教職員等と協力し、教育素材として利用可能な地域の生物多様性情報、自然史情報を収集・整理し、地域教育・環境教育・海洋教育プログラムとしてアウトプットするとともに、教育用標本、写真・映像資料のライブラリ化、指導者向けの資料の整備などを進める。

3) 地域における環境教育、自然教育ネットワークの構築

教員研修会（校内研究会、教育研究会の理科部会、環境教育部会等）、管理者向け研修会（校長会、教育長会）などでの講演活動、学校教育、社会教育の場での講

師派遣などを通じ、四国地域における環境教育、自然教育ネットワークの構築を引き続き進める。また、高知県内において環境教育活動や自然体験活動等に取り組む県民、企業、行政、大学、団体等の相互支援、情報交換を目的として設立された組織である「高知自然学校連絡会」の活動に引き続き参加する。

6. 出版事業

1) 和文機関誌「CURRENT」の発行（年4回発行：5月、8月、10月、2月）

地域の自然や生物に関する話題、財団が実施している研究や事業について紹介する機関誌を年4回（5月、8月、11月、2月）発行する。発行部数250部程度で国内の研究機関、博物館、動物園、水族館、その他関連団体、県内の学校、財団に寄附をいただいた方々などに配布する。発行から1年を経過した号は、財団ホームページからPDFファイルでダウンロードできるように準備中。

2) 英和文学術誌「Kuroshio Biosphere」の発行（年1回オンライン発行：3～4月）

英和文学術誌（紀要）を年1回（3～4月）発行する（平成25年度より冊子体からPDFによるオンライン発行に移行。無料閲覧可能なオープンアクセス）。財団の研究成果・業績の紹介、研究所周辺地域で行われた動植物相や自然史に関する研究報告、研究所を利用して行われた研究報告などを掲載する。PDFファイルは財団ホームページ等からダウンロードが可能。

7. ホームページ、ブログの運用

ホームページ、ブログなどにより、財団に関する情報の公開、黒潮生物研究所の活動紹介、イベント等各種の告知、財団が実施している業務の紹介などを引き続き行う。平成26年度は地域生態系における生物多様性や自然史に関する情報発信機能を高めるべく、整備と活用を進める。